

# 生涯学習

No.533

## かおり高い 文化のまち

発行 下諏訪町教育委員会  
編集 生涯学習  
編集委員会

〒393-8501  
長野県諏訪郡下諏訪町4611-40  
(下諏訪総合文化センター内)  
☎0266-27-1111(内線718)  
FAX 0266-28-0131  
E-mail=syougai@town.  
shimosuwa.lg.jp

生涯学習 2018.10 8

### チャンスボールを楽しもう



下諏訪町

スポーツ推進委員

高木 たかぎ

重由 しげよし

下諏訪発祥のチャンスボールは、子どもさんから高齢者まで、誰でもできるニュースポーツとして定着してきています。

マレットゴルフと同じボールとスティックを使い、コートの上でボールを軽く打って中心の得点ゾーンに入れ合うもので、スティックを軽く振れさえすれば誰にでもできます。

約二十年普及に努めてきて、年に一回のチャンスボール大会も参加チームが年々増えて賑やかに開催しています。

今までに多くの町民の方々に体験して楽しさを味わってもらってきた中で、共通して言えることは、ゲームの最中に笑い声や笑顔が多く見られること、形勢に応じたゲームの進め方を考えるチームワークが出ることです。このゲームは、相手のボールを得点ゾーンからはじき出すことがOKであり、最後の一球は得点ゾーンの近くから打てるので、一気に逆転という変化もあり、最後まで息を抜かず楽しめるゲームです。

皆さん、チャンスボールを楽しみましょう。

### 楽しかったな、チャンスボール



下諏訪南小学校三年

小島 こじま

耕平 こうへい

ぼくは二年生の時から体力作り教室に通っています。なぜ通っているかというと、僕より足の速い子に勝てるようになりたいからです。六月七月は、チャンスボール教室でした。去年はチャンバラ教室だったから、全ぜんちがうきようぎになって、びつくりしました。チャンスボールは、チャンバラと違う面白さがあったて、楽しかったです。まあとむけてボールをうつのは、むずかしいです。相手のじゃまもあるし、びみょうないちにびみょうな強さでボールをうつのは、もつとむずかしいです。しっぱいした時は、「おしいなあ」と思い、少しくやしいです。でも、点が入った時は、むずかしい分かなりうれしいです。チームで協力し、点をとったりとられたり、ミラクルをおこしたりおこされたり、はじきとばして点をへらしたりへらされたりしてドキドキします。チームプレーが大切だと思います。

さい後のし合では、三年生一人と一年生二人と大人一人のチームで、四チーム中三位になりました。一勝できうれしかったです。「これもいいな」とチャンスボールのし合をしながら思いました。このきようぎを、はじめて知ったけれど、楽しかったです。また、き会があったらやりた



## 相撲が教えてくれた大切なこと

下諏訪社中学校三年

美齋津 みさいづ  
葉生 よう

僕と相撲との出会いは、小一の時、父の勧めで参加したわんぱく相撲です。小六の夏に習い始め三年が経ちました。



その間で一番辛く苦しかったのは、中二の時に大きな怪我をし、一年近く相撲がとれなかったことです。稽古したり大会に出たりすることを当たり前に思っていたのですが、大きな怪我をして初めて、それらが当たり前でなかったことに気づきました。稽古のできない間にライバルとの差が大きくなってしまっているのではないかとという不安に押しつぶされそうな自分がいました。

そんな時、僕を助け、支えてくれた人たちがいました。「焦らず今できることをやろう。怪我を乗り越えて強くなった選手はたくさんいる。」と励まし続けてくださった相撲クラブの先生方。毎日の丁寧な治療で怪我の回復を助けてくださった整骨院の先生方。筋トレをサポートしてくださったジムスタッフの皆さん。復帰を温かく見守り、励ましてくれた社中バレー部の仲間や先生方。そして、僕が一番近くで、毎日一緒にトレーニングに付き合ってくれた父。本当にたくさんの人たちの支えのおかげで、僕は、苦しい時期をあきらめず乗り越えることができました。

ようやく復帰して迎えた中三の中体連。全国大会出場決定戦で一位になった時の喜びはとつともなく大きいものでした。支えてくれた方々への感謝の気持ちで涙と一緒にあふれ出しました。どのような状況にあっても、その時、自分のできることを精一杯やるのが結果につながっていく、そんな大切なことを教えてくれた相撲に感謝しています。

## 数秒のために



下諏訪社中学校三年

長田 おさだ  
健汰 けんた

相撲は、他のスポーツに比べて、短い時間で勝負がつきます。ほとんどが秒単位です。その短時間での勝負のためにけいこをします。四股、すり足などの基礎けいこから始まり、一押し、相撲へと続きます。そのあとぶつかりをします。ぶつかりというのは、土俵の端から端まで使って、思いきりぶつかり合い、それから相手を土俵の外まで押すけいこです。ぶつかりは残っている体力を全部出し切ります。全力で相撲を十番、それ以上とる日もあり、そのあとぶつかりは本当にきついです。ですが、土俵の上の短時間の勝負のためには絶対に必要なので頑張ってやり切ります。

ここに写っている写真は、今年木曾町で行われた中部日本選抜中学生相撲大会の時撮影したものです。この大会は、東海・北信越地区からも参加があり、レベルが高い大会です。ぼくはこの大会で、ベスト8になり、最優秀選手賞をもらえたのですが、相手の気迫に負けずに、より速くより強いあたりを意識して、さらに上位を目指したいと思っています。

最後に、相撲は、礼に始まり礼に終わると言われるほど礼儀を大切にするので、いつも気持ちのいいあいさつを心がけています。



# 演ずる魅力

町社会教育指導員 三井 ひかり



「え、オペラ？」  
私がやっていると伝えると、大抵の人が目を丸くする。私にとって、オペラは「生きる力」であり「人と向かい合える」たぐいまれな存在だ。そして、その過程の中には、あらゆる要素が存在する。

まず、あるストーリーがある。そのストーリーの中に入り、一人の人物を演ずる。役によっては幼児から老婆まで年代は様々で、時には少年だったりもする。したがって日ごろから周囲の人たちが観察対象となり、その自然な動きや思考に私の目は向けられる。あ、今あの人は何に気がとまったのだろうか。とか、このタイミングで笑いだした理

由はなんだろう。とか。

オペラの醍醐味は声の魅力であるが、超音波のようなビームに乗せて、怒りや喜びや悲しみをストレートに表現することは、ストレスの解消にとっても良い。

また、この細い超音波のビームを発することは、サーカスの曲芸をするのと似ている。数十年の修行

によつて、空中で綱渡りを難なくこなしているように見せることができるように



昨年の「第一回十字軍のロンバルディア人」のカーテンコール

なる。いつ落ちるか、はらはら観ている観客。澄ました表情で渡りきったとき、感動とため息にブラボーの歓声が起る。これもまたオペラ鑑賞の醍醐味であろう。

また、オペラは総合芸術でもある。今秋、志を一つにした仲間と、諏訪の地で初めてオペラを上演する。計画中の舞台では、指揮者、演出家、合唱団、俳優、ダンサー、ピアニスト、オーケストラから始まり、衣裳、舞台美術、メイク、ヘアメイク、小道具の職人さん、着付けまで合わせると、総勢七十名ほどのメンバーで十ヶ月かけて一つの作品を作り上げる。

普段生活していて、これだけ多くの職種の方と出逢い、共に何かを成し遂げることがあるだろうか。それぞれが真剣に最高なものを生み出そうとする様子に、日々感銘を受ける。しかし、火花は一晚で打ち上がってしまう。その後の空虚感と言ったら。これは例えようもない。しばらく抜け殻のように動けなくなる。エネルギーは尽きているの

だが、心の中はひどく満たされている。そんなわけで、懐は寂しい一方だがやめられない。現在取り組んでいるのは15歳の娘芸者、蝶々夫人。明治時代の長崎でアメリカ人の現地妻となり、最後には捨てられて自害するという役柄。15歳はおもちゃとお菓子の年頃だそう。その年頃の子を探しながら町を歩くのが楽しみである。



「蝶々夫人」の立ち稽古風景

# 合唱に魅せられて

萩倉 野村 光夫



合唱を始めて十年になる。きっかけは、若い頃から歌っていた妻からのお誘い。当時、妻が所属する女声合唱団と私が入団することとなる男声合唱団とのジョイントコンサートが迫る中、二年に一度の下諏訪文化センターステージでの晴れ舞台の内側を見聞する機会があり、大勢の仲間とハモって合唱する楽しさ、緊張感、感動、達成感に魅せられて、はまってしまった。

当初は、慣れない楽譜での懸命な音取り、リズム取りに苦労する。学生時代ギターの経験があり、楽譜は見慣れていたものの、合唱はその音を自分の声で出す分、楽器と違う。最初は階名（ドレミファ）で音を取り、歌詞をつける。

最近では初見（初めて見る楽譜）でも音がとれるようになってきている。さらにボイストレーナーの先生より技術的な発声・歌唱力アップへの指導「カラオケとは違う発声、喉頭蓋こうとうがいを開けて（口の奥を広げて）！」と。究極を極めるのは難しい。現在三団体に所属。男声合唱団「シルキーナイト」では、男声四部合唱（私はバスパート）の重厚さ、醍醐味を楽しみ、会長職も経験。「しもすわ混声合唱団」では管弦楽との共演でミサ曲にも挑戦。「アンサンブルシヤンテ」では、老人ホーム等への慰問で気楽に楽しむ。歌の曲目は、クラシック、ポピュラー、



フォーク、歌謡曲、唱歌、合唱曲、民謡等、様々なジャンルに渡り、ベートーベンの第九も経験させてもらった。会社の仕事以上に、一生懸命多忙な趣味の時間を過ごす日々。

合唱はまた健康にも良い。練習前の（かなりの）体操、ストレッチ。下半身はしっかり踏み張る安定させ、上半身はリラックサス、脱力、腹式呼吸、胸式呼吸、良い姿勢での発声練習。体が楽器。お金も掛からない。楽譜代、毎月のレッスン代、衣装代くらい。いつでもどこでも誰とでも歌える、声を合わせることもができる。

合唱は一人ではできない。仲間との信頼、協調、共感、和が必要。コンサートが近づくと、曲の出来映え、完成度、指揮者の求める音楽のレベルにあげるプレッシャー、苦痛に感じ悩むこともある。

合唱人口は多く、諏訪地区でも私の知っているだけでも三十以上の合唱団がある。お互いのコンサートに行き合うこと年間十回ほど。お客様に聴いてもらい、感動を届けられれば最高。歌える幸せ、歌える喜びをかみしめながら、自分たちが楽しむのが一番。合唱仲間には高齢者も多いが、幾つになっても歌えるところが合唱の良いところでもある。これからも笑顔で歌っていきましょう！皆さんも一緒に歌いませんか！



# 下諏訪と音楽

平沢町 富永 忠明



「ライブハウス」と言われて、ピン！とくる方はいらっしゃると思いますか？若者が多くて、音楽を演奏していて、暗くて、タバコくさいイメージ？

初めまして！下諏訪の平沢町で「チャーリーズハウス」というライブハウスをやっています。店を始めて現在四年、今年で五年目になります。



「ここ下諏訪でライブハウスを始めたい」と言われて、元々は伊那でライブハウスをやっていたり、音響に関わる仕事をつづけて二十年。それしか取り柄がないのですが、なかなか一般的には分かりづらい業種です。下諏訪は気さくな方が多くて

お話をしているうちに、私たちのライブや音楽、楽器に対する感覚が一般とはズレていると感じ始めるようになりまして。ライブハウスは、暗くて大きな音を

出す閉鎖的な怖い空間。楽器はやってみたいけど高価かもしれないし、どこで買えばいいのかわからない。音楽は聴くけれど、ジャンルとか詳しくないし、話についていられないかもしれない、等々。

狭い世界で生きてきた私にとって、皆さんのお話は目からウロコでした。それならばとライブハウス内でカフェ、バーを始めたり、道路から店内が見えるよう窓をつけたり（窓があるライブハウスは少ないです）音楽に対する感じ方のハードルを下げる工夫を続けました。

開店当初から続いているイベントで現在八十回を超える「つぼみの会」という企画があります。ギター初心者が集う会なのですが、講師がいません。みんなで行って弾いて初心者同士、ちよつと弾ける人がちよつと弾けない人にちよつと教えるというなんともフンワリとした企画ですが、これが長寿企画になっています。

下諏訪は素晴らしい街です。私は秋宮の近くに住んでいます



が、昼間は観光客の雑踏でにぎわい、夕方は家路に就く人と居酒屋さんの準備の音が夕暮れの中交差します。真夜中はしんとした空気の中、虫の音と時折聞こえてくるブツポウソウの声。下諏訪町が織りなす音たちは、そのまま音楽です。

## この町で宿を始め



マサヤゲストハウス 齊藤 希生子きよひこ

二〇一四年八月に平沢町の元「ますや旅館」を改装し、「マサヤゲストハウス」としてオープンしました。ゲストハウスというのは、素泊まりが基本で、シャワーやトイレ、キッチンなどを全て共有する代わりに、安価で気軽に泊まれる宿泊施設です。海外からの旅行者や、学生さんの利用者が多かったのですが、最近は日本各地に増え、知名度も上がり、幅広い年代の方が利用するようになってきました。

出て、その地を深く知ることができるところがゲストハウス。各地のゲストハウスに泊まり、好きな地域がたくさんできた私は、地元も誰かにそんなふうにしてもらえたら嬉しいな、と思ってもらえた。嬉しいな、と思身地である諏訪地域を開業の地に決めました。諏訪地域の中でも、交通の便もよく、歴史的な建物や、美味しい老舗のご飯屋さん、もちろん諏訪大社や温泉、そして個性豊かな店主のいる素敵なお店が本当にたくさん！全てが歩ける範囲の中にキ



ゲストハウス外観

ュツと詰まった下諏訪町は、とても魅力的な町で、旅の拠点にもぴったりだと思ひ、この地に宿を構えることにしました。

オープンしてから四年。この町で宿を始めたこと、この町に住んでいること、よかったなと思うことばかりで、どんどん下諏訪が好きになっていきます。

早朝に温泉に入り背中を流してもらったこと、慈雲寺の苔がとても美しく、時間を忘れて見とれてしまったこと、店主のお話が楽しくて消灯時間ギリギリまで帰ってこれなかったこと、今まで食べた中で一番美味しいうなぎだった！と感動してくれたこと、宿泊してくださる皆さんから、下諏訪滞在での嬉しかった出来事を聞くことや、「こんなに良い町だったなんて知らなかった！」と言ってもらったことが、本当に嬉しく、宿を始めよかったです。下諏訪は見所がたくさんあります。下諏訪は「また会いたい」と思う素敵な人のたくさん住んでいる町。こうしてみんなを受け入れてくれている町の方々のおかげで、



宿泊客の皆さんと

宿を続けていられることをとてもありがたいと思っています。初めて下諏訪に来たという方もとても多いマサヤ。マップを広げて町の案内をすると、「一日じゃまわりきれない！」と、驚かれることがよくあります。住んでいてこんなに楽しい、魅力たっぷりのこの町の楽しさを、まだまだたくさんの方に伝えていきたいと思っています。

歴史の町下諏訪。各区に眠っているお宝を、地元の方に解説していただきました。

## 萩倉の宝物 — 女工さんの供養 —

萩倉 小河原 進

萩倉は七年に一度、御柱出し祭の会場として、氏子や観光客で大いに賑わいます。祭の前日には、準備のために入り込む車で、県道八島線に交通渋滞が発生します。そして三日目の昼、秋宮一の御柱の通過と共に、突然にいつもの静寂が戻って来ます。

このお祭りの喧噪と静寂が、萩倉の歴史に重なり合って私には感じられます。



萩倉郷友会の制作になる看板



女工さんの寢室（下諏訪町誌下巻より）

まだ中央線が開通する前、当地は生糸の生産で栄えたと聞きました。村内に大きな三階建ての木造の建物があり、子どもながらに「なぜこんなに大きなお蔵があるのだろうか？」と不思議に思っていました。それが女工さんたちの寝室であったことをあとから知りました。さらに年を重ねて村の役が回って来、萩倉共同墓地に『女工さんのお墓』があることを知りました。



共同墓地に残る女工さんのお墓

「この村は新参者に冷たい。」と若い頃に聞いたことがあります。そんな村ではありますが、町内会長になると誰もが、共同墓地の草刈りをし、女工さんたちの供養をします。これが毎年延々と引き継がれていくのです。名前の刻まれた墓石もあります。共同墓地には、故郷に帰ることなく当地で命を落とした無縁仏も埋葬されているようです。どこで生まれて萩倉までやって来て、どんな気持ちで女工として働き、どうして命を落としたのか？お骨は何故家族に引き取られなかったのか？ご家族の子孫は今、どうしておられるだろうか？あるいはこうして萩倉で供養されることも幸せなこと



かも知れない、などいろいろなことを考えます。今年も夏の暑い盛り、町内会長は草刈りに汗を流すのでありましょう。



きてね

# としょかんまつり2018

## 10/20(土) 21(日)



きてね

家族みんなで楽しめる企画満載！ぜひこの機会に図書館にいらしてください。

期間中、いつもは入れない閉架書庫の見学も行います。予約制ですのでお電話で予約をしてください。

20(土)		時間	21(日)	
9:30~		9:30		9:30~
展示		10:00		展示
・下諏訪俳句会				・下諏訪俳句会
・エンジョイフォトSUWA写真展				・エンジョイフォトSUWA写真展
10:00~12:00	10:00~12:00	10:30~12:00	10:30~12:00	10:00~12:00
体験しよう朗読点字	こども俳句教室	おはなしの広場 北小生徒による劇 社中生による大型絵本読み聞かせ 星の会の朗読 おはなしのへやによるペープサート	なかよしコンサート 子どもたちのかっこいい演奏をお楽しみください マジックショー	体験しよう朗読点字
		11:00		
		12:00		
		13:00		
		14:00		
		15:00		
		16:00		
15:00~16:00	15:00~16:00		14:00~16:00	
雅楽と朗読のおくりもの ・下諏訪中学校雅楽会 演奏 ・やまびこの会 朗読	図書館のお宝蔵展 図書館の閉架書庫に保管されている貴重本を手にとりてご覧いただけます。			

問い合わせ先 下諏訪町立図書館 0266-27-5555

### ほのぼの

### まちかどで

目まぐるしい一日にふうつと一息入る夕暮れ時、オルゴールが五時を告げた。「十月、夕焼け小焼け、九月、あざみの歌」息子がポツリと呟いた。ハツとして「そうなの？」と聞き返すと、「四月から九月、六時：あざみの歌。十月から三月、五時：夕焼け小焼け」と教えてくれるではないか。そう、今日は十月一日であった。彼は「今日から夕焼け小焼けで、五時に変わったね」と言いたかったのかも知れない。

我が息子は知的障がいを伴う重度の自閉症を持つ。人との会話は決まった単語を使うカタコトのやりとりのみである。彼はいつも自分だけの世界：とりわけ、音の世界を楽しむ。が時々、外の世界の者が立てる音に耳を傾け、その音の持つ意味を自分なりに探っている。この街には、ひととき美しい音色のオルゴールが流れる。日々の慌ただしさにもがいていく私にはそれを味わうゆとりがなかった。そんな時、穏やかに流れる息子の世界が垣間見えたようで、ふんわり包まれてしまった。

(宮尾 ひかり)